

# 令和4年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市名

滋賀県

学校名

滋賀県立国際情報高等学校

人権課題

子ども

対象学年・  
取り扱った教科等

全学年・全教科

目標・人権教育のねらい

学校が「子どもが安心して生活し、学習できる場所」となるような環境づくり  
コミュニケーション能力を育み、いじめのない健全な仲間づくり

実施した内容

生徒が安心して生活できる居場所づくりの一環として、朝の挨拶運動を行い、教師と生徒の信頼関係を作るよう心掛けた。また定期的な面談や通信の発行など、子どもの様子を常に把握するよう努め、環境づくりにいかした。  
各教科において、ペアワークやグループワークを積極的に取り入れ、発表したり自身で考えたりする機会を設けるなど、コミュニケーション能力を高めるとともに、互いを認め、尊重し合える関係を築く機会を作った。

工夫した点

朝の挨拶運動には生徒会執行部の生徒も参加することで、教師と生徒の信頼関係だけでなく、子ども同士の関係性を築けるようにした。また生徒の様子の変化にいち早く気づき、気になる生徒には担任との面談等を通して声をかけるようにした。  
ペアワークやグループワークでは「他者の意見を否定しない」を大前提にすることで、話しやすい環境づくりに努め、より多くの生徒が自らの考えや意見を表現できるよう配慮した。また、相手の考えを丁寧に聞く（ことで、自らと異なる考えを知り、意見の共有を通して、互いの存在を認めあえるよう工夫した。

他教科との  
関連

特別活動、各教科（ペアワーク、グループワーク）

事業成果

知識的側面：「授業の内容が分かり、授業を受けることが楽しい」と答えた生徒が70%近くいた。また約70%の生徒が「授業を受けることでコミュニケーション能力が向上していると思う」と答えた。  
価値・態度的側面：80%近くの生徒がやる気をもって学習に取り組める環境だと答えている。また90%近くの生徒が、「誰もがかけがえのない存在であるという意識のもとに、自他を尊重できている」と答えた。

# 令和4年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市名

滋賀県

学校名

滋賀県立国際情報高等学校

人権課題

子ども・女性・高齢者・  
障害者・外国人など対象学年・  
取り扱った教科等

第1学年・LHR

目標・人権教育のねらい

人権教育は、学校生活の中でさまざまな個性や価値観に出会い、一人ひとりの感じ方の違い・考え方の違いに気づき、お互いの違いを認め尊重できる姿勢を身につけることを目標としている。

そこで、中学校までの人権学習を振り返り、改めて「人権とは何か」ということについて具体的に考えることで、人権感覚を磨き、差別の芽に気づく力を培うことを目的とする。

実施した内容

各HR教室にて、資料を見て今まで学習した人権学習について振り返る。また、動画を見ながら「アンコンシャスバイアス」について学び、自分の言動や進路選択を振り返る時間を設けることで、自分の無意識の感覚意識を省みる機会を持った。

工夫した点

興味関心をひきやすい人権マップを見ながら、小学校・中学校での人権学習を振り返った。その際、ペアワークを取り入れ、周りの意見を聞くなどの時間を設定した。

アンコンシャスバイアスについては、単に言葉で説明するのではなく、具体的な動画（理系と文系の選択や学校行事など）を見せることで、自分に引き付けて考えることができた。

他教科との  
関連

特別活動・産業社会と人間

事業成果

知識的側面：アンコンシャス・バイアスについては、ほぼ100%の生徒が新しく知ったと答えていた。

価値・態度的側面：無意識による差別について、95%以上の生徒が自分の言動を振り返ったと答えた。

# 令和4年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市名

滋賀県

学校名

滋賀県立国際情報高等学校

人権課題

同和問題

対象学年・  
取り扱った教科等

第2学年・LHR

目標・人権教育のねらい

現在未だに「部落問題」が残っていることを知り、あらゆる差別事象が不当なものであり、差別される側に大きな傷を残すということを認識する。また、その中で、教師自ら自身の部落差別問題についての自分の思いを語り、立ち位置を示し、生徒とともに学習する。

実施した内容

事前学習で基礎的な知識を確認してから講演を迎える予定であったが、大雪のため学校が休校となり事前学習ができなかった。そこで講演を聞いてから事後学習に取り組むことになった。

工夫した点

講演では事前に講師の先生と打ち合わせを繰り返し行い、生徒が興味を持ち、自分にもかかわりのあること、現在も部落問題が残っていることと考えられるかということ工夫した。事後学習に向けてのスライドでは、写真やクイズを入れるなどして生徒が興味関心を持てるようにした。また、複数人体制で行い、生徒の様子を丁寧に観察・対応した。

他教科との  
関連

日本史・特別活動

事業成果

知識的側面：ほぼ100%の生徒が分かったと答えており、新しく知ることができたと答えた生徒が約90%であった。  
 価値・態度的側面：多くの生徒が自身に結び付けて考えられたと答えたが、わずかに自身に結び付けて考えられなかったと答えた生徒がいた。内容についてはさらなる工夫が必要だと感じた  
 技能的側面：今回の学びで終わらず、自身でもさらに学びたいという生徒も見られた。

# 令和4年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市名

滋賀県

学校名

滋賀県立国際情報高等学校

人権課題

女性・同和問題・外国人・子ども

対象学年・  
取り扱った教科等

第3学年・LHR

目標・人権教育のねらい

アンコンシャスバイアスについて知ることで、さまざまな人権課題に対して自分にできることは何なのかを考えることを目的とする。

また、身近に迫った進路決定において実際にあった差別と差別解消の歴史を学ぶことで、人権感覚を磨き、差別に立ち向かう力を養うことを目的とする。

実施した内容

動画を見ながら「アンコンシャスバイアス」について学び、自分に言動や進路選択時におけるを振り返る時間を設けることで、自分の意識していないことを省みる機会を持った。

滋賀県進路保障協議会から講師を招き、就職差別問題と進路保障というテーマで講演をしていただいた。また講演を受けた後、その振り返りと近畿統一用紙について学習し、進路を保障されることは子どもの権利を守るためにも重要であることを振り返った。

工夫した点

アンコンシャスバイアスでは、TVCMを題材に取り上げることで、より身近なことだと意識できるようにした。また、そこで自分の中にもアンコンシャスバイアスがあることを振り返ることができた。

講演の途中で、講師と国際情報高校教員との面接のロールプレイを見せることで、より具体的に生徒にイメージできるようにした。

他教科との  
関連

特別活動・総合的な探究の時間

事業成果

知識的側面：講演のについて94%の生徒が「新しく知ることができた」と答えた。アンコンシャスバイアスについても90%以上が「わかった」と答えた。

価値・態度的側面：自分自身の経験と結びつけて考えられたと答えた生徒が95%であった。

技能的側面：振り返りの中で「より意識したい」という決意が多く、不適正質問に対してもどのように対処すれば良いか分かったという意見が多く見られた。

# 令和4年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市名

滋賀県

学校名

滋賀県立国際情報高等学校

人権課題

子ども・女性・HIV感染者等・  
「性と生命」の問題対象学年・  
取り扱った教科等

第2学年・LHR

目標・人権教  
育のねらい

海外（ケニア）の現状を知ることで、日本とは異なる文化を学ぶ。エイズの現状を知るとともに、「性」については、個々で考え方が異なること、「自分らしく生きるとは」について考え、「性」と「人権」のつながりを学ぶことで、他者や自己の人権について考えることを目的とする。

実施した内容

青年海外協力隊としての経験がある方を講師として招き、海外（ケニア）の子どもから大人までの性と生にかかわる現状を知ることで、異文化を学び、困難な状況にある海外の子どもたちに対して何ができるのか考える時間を設けた。また、クイズや画像、ワークショップを行うことで、すべての生徒が性とHIVについて考える機会が持てた。

工夫した点

講師と相談し、ワークショップを取り入れ、生徒が実際に体験し学ぶ機会を設けた。事前アンケートや事後の振り返りを行うことで、じっくり考えることができた。

他教科との  
関連

保健体育・家庭・地理

事業成果

知識的側面：新しいことを知ることができたと答えた生徒が90%以上いた。  
 価値・態度的側面：今までの自分の行動を振り返ったと答えた生徒がほぼ100%であった。  
 技能的側面：今後の自分の行動（性との向き合い方）について考えたと答えた生徒が多かった。

# 令和4年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市名

滋賀県

学校名

滋賀県立国際情報高等学校

人権課題

インターネットによる人権侵害・子ども

対象学年・  
取り扱った教科等

全学年・LHR

目標・人権教育のねらい

スマートフォン等の普及により、ネットトラブルに巻き込まれたり、無料通信アプリを使用した誹謗・中傷や、ネット上でのいじめ等の事案が数多く発生したりしている。これらの事案に対処するために、スマートフォン等の利用に関わるトラブルとその対処法について正しい知識を習得するとともに、相手の気持ちを考え、思いやりの心を持つことの必要性・重要性についての理解を深める。

実施した内容

N T T docomoから講師を招き、子どもたちの中で実際に起こっているSNS上でのコミュニケーショントラブル事例を取り上げ、また、人権侵害についての講演を実施した。講演会の後、振り返りシートを記入させた。

工夫した点

公開授業の日に講演会を実施することで、保護者の方にも講演を聞いてもらう機会を設けた。各HR教室にプロジェクターが設置されたので、Zoomを使いオンライン講演を行った。

他教科との  
関連

情報、保健体育、家庭、公共

事業成果

知識的側面：この分野の学習には85%の生徒が興味を持っており、実施後のアンケートでも90%以上の生徒が「正しい知識を知ることができた」と答えた。  
価値・態度的側面：ほぼ100%の生徒が、今後SNS等の使い方に気を付けたいと答えた。

# 令和4年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市名

滋賀県

学校名

滋賀県立国際情報高等学校

人権課題

性的指向、性自認・子ども

対象学年・  
取り扱った教科等

第1学年・LHR

目標・人権教育のねらい

- ・性的マイノリティーに対する差別や当事者の生き辛さを理解する。
- ・性的マイノリティーに対して自分が持っている偏見を見直し、より正確な知識を学ぶ。
- ・性のあり方は男女の二通りだけではなく、一人ひとり違うことを知る。
- ・性的マイノリティーに対する差別や偏見をなくすために自分ができることは何かを考える。

実施した内容

各HR教室にてスライドを見せ、基本的な知識を学び、「性の多様性」とは何かについて考える時間を設けた。講演会では、びわこ学院大学の教授を講師に招き、生徒に対して事前アンケートを行うことで、生徒の実態を把握した上で、性的マイノリティーの現状についての話をしていただき、自分自身だけでなく同世代の若者の人権について学ぶ機会とした。

工夫した点

各HRの事前学習において、当事者がいる可能性を念頭にスライドを作成し、学年団と打ち合わせでは共通理解を図った。  
クイズを取り入れることで、各生徒が興味関心を持って自ら考える時間を設けた。また、ペアワークを行うことで、自分とは異なる意見を聞き、自分の考えを省みることで、学びを深められるようにした。講演では講師と事前に相談の上、ゼミ生からも話をしてもらうことで、生徒にとってより身近な問題であると捉えられる内容になった。

他教科との  
関連

家庭・保健体育・公共

事業成果

知識的側面：理解が深まったと答えた生徒が98%であった。事前学習をしたことで講演の内容がより分かりやすくなったと考えられる。  
価値・態度的側面：自身の経験と結びつけて考えられたと答えた生徒がほぼ100%であった。  
技能的側面：振り返りの中で「他者の価値観をより尊重したい」という意見が多く見られた。

# 令和4年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・  
指定都市名

滋賀県

学校名

滋賀県立国際情報高等学校

人権課題

女性・性的指向、性自認・子ども

対象学年・  
取り扱った教科等

第3学年・LHR

目標・人権教育のねらい

現代社会において大きな社会問題の1つである「DV」(ドメスティックバイオレンス：配偶者や恋人などの親密な関係にある相手を暴力によって支配すること)について考え、人権を考える機会とする。また、若者に多い「デートDV」についても学びを深め、こういった問題の基本的なコミュニケーションや人間関係の作り方、DVに遭遇した場合にどのように対応すれば良いかについても学習する。

実施した内容

びわこ学院大学の教授を講師として招き、デートDVについての講演をしていただいた。具体的な事例を挙げて説明してもらうことで、身近な問題であると考えさせることができた。生徒の実態を把握した上で、中学・高校生のデートDVについての話をさせていただくなど、自分自身だけでなく同世代の若者の人権について学ぶ機会とした。

工夫した点

依頼した教授のゼミに本校卒業生がいたことから、講演のサポート役として来てもらい、話をしてもらった。本校卒業生ということで、在学生にとってもより身近な存在であることから、非常に真剣に講演の内容に向き合うことができた。

他教科との  
関連

保健体育・家庭・公共

事業成果

知識的側面：新しく知ることができたと答えた生徒が90%いた。  
 価値・態度的側面：自身の行動を振り返ることができたと答えた生徒が90%いた。  
 技能的側面：具体的な例が挙げられたことで、今後の行動の参考にしたいと答えた生徒がほぼ100%であった。